

新潟・^{おきの}沖ノ羽遺跡

- 1 所在地 新潟市秋葉区七日町字沖ノ羽
- 2 調査期間 二〇〇七年(平19) 六月～二月
- 3 発掘機関 新潟市教育委員会(新潟市埋蔵文化財センター)
- 4 調査担当者 遠藤恭雄
- 5 遺跡の種類 集落跡
- 6 遺跡の年代 古墳時代～中世
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要



(新 津)

沖ノ羽遺跡は、阿賀野川と能代川に挟まれた標高四～五mの自然堤防上に立地し、東西一・二km南北一・五kmの範囲に広がる。圃場整備事業に伴って、一九九六年から継続的に発掘調査が行なわれており、二〇〇七年は約四七〇〇m²を調査した。調査の結果、八世紀～九世紀、一二世紀後半～一五世紀前半の遺物が出土し、掘立柱建物一〇棟以上、井戸八五基、土坑二四九基、

溝一七八条など多数の遺構が検出された。出土遺物からみて、遺構は中世を主体とするものと推定される。

木簡は、井戸SE五〇〇から一点、井戸SE一五三八から一点、計二点が出土した。SE五〇〇は、直径約3m深さ一・三mの素掘りの井戸で、底面付近には濾過用と考えられる筵状製品が敷かれていた。木簡はこの直上で出土しており、他に須恵器・土師器・珠洲焼・小刀・漆塗碗などを伴うことから、中世のものと推定される。

SE一五三八は、直径二m深さ一・三mの素掘りの井戸で、木簡は底面付近から出土した。土師器・須恵器の小片を伴うが、時期は明確でない。

8 木簡の釈文・内容

SE五〇〇

(1) ・「くめやすひくわれ□□」

・「>□□ソマカハウ□□□□□□」
ちくちのむ□□□□□□ 154×22×1 032

SE一五三八

(2) 「符録」□□□□ 151×25×4 051

(1)は厚さが1mmとさわめて薄く、上端の左右に切り込みを入れる。表裏両面に文字が記されるが、内容は不明である。

(2)は符籙に続けて数文字が記されているが、墨痕が薄く判読できない。呪符と考えられる。

なお、木簡の釈読にあたっては、新潟大学の矢田俊文氏、上越市公文書館準備室の福原圭一氏、新潟県立歴史博物館の前嶋敏氏のご教示を得た。

(1) 7 遠藤恭雄、8 相沢央〈新潟市歴史文化課〉



(2) 赤外

(1) 赤外

新たな百済木簡の出土

韓国木簡の研究は、これまで新羅木簡が中心であったが、最近、百済木簡の出土が相次いでおり注目される。

まず、韓国木簡学会発行の学術誌『木簡^と文字』創刊号で、扶余・双北里ヒョソネドウル北浦遺跡から七点以上の木簡が出土していたことが公表された(李阪燮・尹善泰「扶餘雙北里^{ヒョソネドウル}현내들・北浦遺跡^의 調査成果」)。いずれも断片的な内容だが、「□率牟氏^丁」など人名と丁数を列記したものや、「德率首比」という官位と人名を記した付札がある。

また、二〇〇八年四月、すぐ近くの双北里一八〇―五番地遺跡からも六点の木簡が出土した。これまでに公表された一点は、残存長約二九センチで表裏とも三段に分けて人名と石数を列挙している。同年七月には羅州・伏岩里遺跡から、百済では初めての地方木簡が二点出土した。一点は残存長三三センチあり、「中□四」など人の管理に関わると思われる内容が数段に分けて数十字記されている。いずれの木簡も、百済の文書行政の水準を示す重要な資料であり、今後の調査・研究が期待される。なお、これら二カ所の遺跡についての報道資料は、韓国文化財庁ホームページで公開されている。

(橋本 繁)